



嗚呼コイ物語



momishin

朝目が覚めて時計を見ると、あ、これは遅刻したなと思った。目覚ましは最初からセットしていない。

のそのそと起き上がり、洗面台に向かう。慌てない慌てない。例え遅刻のし過ぎで出席日数が危うくとも。

朝飯はなにを食うか。パンは切らしてしまっているが、ごはんは炊飯器に残っていたので、冷蔵庫に入っていた適当なおかずと一緒に温めて食べることにした。もちろん、ちゃんとよく噛んで食べる。我ながらなんと健全なことだろう。遅刻するのは不健全かもしれないが。

そして家を出るころにはカール・ルイス並の速さで走らないと学校に間に合わなくなっていた。ちなみに自転車は持っていない。

遅刻は確定だろうが、一応はそれなりに急いで走る。

走っていると後ろから足音が聞こえてきた。俺以外にも急いでいる人がいるのかな？ と思っている間にもその足音は近づいてきて、あれ、やたら速いな、と後ろを振り返ると、

ズゴン！

「きゃあ！」

「ごぶうっ！」

俺は飛んでいた。

ああ、空が青い……。青い空を見ると、幼いときのことを思い出す。

母さん、空はどうして青いの？

それはね、父さんが浮気して母さんがとってもブルーだからよ。

ああ、空気の読めない子供でごめんよ母さん。でもその答えはどうかと思う。しかも浮気って結局母さんの勘違いだったし。

そこで幼い日の思い出から現実に意識が切り替わる。気がつく俺は道の真ん中で倒れていた。

「……なにが起きたんだ？」

「いたたた……」

声のするほうを向く。そこには女の子がいた。俺の通っている学校の制服を着ている。そこまで認識したところで女の子がこちらに視線を向け、目が合った。

ドッコーン！ と体に稲妻が落ちたような衝撃。女の子を見つめたまま、俺は動きを止めた。自分に起きたことに自分で対応できない。

「すみません！ 急いでいたので……」

女の子の言葉はそこで途切れ、彼女もこちらを見たままの状態動きを止める。

永遠と思うような一瞬。

だが、彼女は急に時計を見て、

「ああっ、遅刻しちゃう！ 本当にすみませんでした！」

と頭を下げた後、猛烈な勢いで走り去っていった。カール・ルイスより速いかもしれない。だがそんなことより重要なのは俺の精神状態だ。俺に一体なにが起きている？ この気持ちはなんだ？

「おいキミ、大丈夫か？ 頭から血が出ているよ」

その声で我に返る。話しかけてきたのはサラリーマンらしき男だ。血が出てようが脳髓が出てようが今の俺にはどうでもよかったが、見ず知らずの人に心配をかけさせるのはよくない。

「大丈夫です。えーと、これは血ではなくて、なんというか、その、汗です。実はここだけの話、俺の汗は赤い色をしていまして、特に頭にかく汗は血と間違えるほど赤いんです。カバの汗はピンク色だっていう話は知ってますか？ カバの汗状分泌物には赤とオレンジの二つの色素物質が含まれていて、紫外線をカットしたり、細菌感染を防いだりする効用があるんですが、ある学者の話では、俺の汗も似たような分泌物が含まれているのではないかということなんです。ただ、カバの汗よりずいぶん赤いので、もっと別な物質なんじゃないかと多くの研究者たちが調べて――」

男は深刻な顔になった。

「相当強く頭を打ったようだね。いま救急車を呼ぶから」

「いえ！ 本当に大丈夫です！」

面倒なことになる前に俺は走り出した。



目覚ましをセットしていなかったわけでも、朝ごはんをちゃんと噛んでゆっくり食べていたわけでも、ましてや女の子と朝ぶつかって運命的な出会いがあったわけでもないのに草野は遅刻した。

「はあ、草野……。お前は何回遅刻すれば気が済むんだ？」

草野が教室に入ったときやっていた授業は、担任の吉田の担当教科である国語だった。草野は用意していた言い訳をし始める。

「いやあ、学校に来る途中で道に迷っていたお年寄りを案内したらそのお礼に宝くじをもらって、その宝くじが大当たりでなんと三億円。この大金を有効に使うべく世界旅行に出かけたらちょっと遅れてしまいました」

「そうか、短い時間ですごい経験をしてきたな。じゃ、今日の教室掃除お前一人でやってくれ」

「先生、話がつながってません。なぜおれが教室掃除を？」

「遅刻をした罰だ」

「先生、おれには遅刻が許される素晴らしい理由があると思うのですが」

「わかったわかった。雑巾がけまでやってもらうことにしよう」

「先生、実はおれの親はいわゆるモンスターペアレントというやつでして。こんな理不尽な処罰をすれば学校に苦情がいきますよ？」

「家庭訪問行ったときご両親には、馬鹿な息子をよろしくお願いします。いくら厳しくしてもかまわないので見捨てないでやってください、と涙ながらに言われたぞ。記憶が確かなら、お前も一緒にその言葉を聞いていたはずなんだが」

「先生、ありもしない事実をでっち上げてまで生徒を陥れるなんて最低です。もうおれは法廷で争う気満々ですよ」

「うん、じゃあトイレ掃除も追加ということで」

「そんな馬鹿な――」

そこで教室の戸が開いた。

「中村、お前も毎回毎回遅刻してきやがって。草野と一緒にトイレ掃除させるぞ」

ぼけーとした顔で中村が入ってきた。草野と並んで遅刻の常習犯だ。

「すみません、先生」

それ以上なにか言うこともなく、中村は自分の席に座った。それを見て吉田は怪訝な顔になる。いつもであればもう少し誠実な態度で謝るのだが、様子がおかしい。

「中村、トイレ掃除やりたいのか？」

「やりたくないです」

中村の視線はなにもないところをさまよっている。

「具合が悪いのか？ 保健室行ってきてもいいぞ」

「大丈夫です」

表情が心ここにあらずという感じなのに、言葉ははっきりしているのが逆に不気味だ。

「む、無理はするなよ。掃除もやらなくていいから。草野、お前も今回は許してやるが、次はこうはいかないからな」

「ありがとうございます」

ラッキー、と草野は内心喜んでいた。

「えーとどこまで話してた？ そうそう、教科書七十九ページの――」

「今日も見事に遅刻したねー。お前ちゃんと進級できるの？」

「ああ、まあ、多分大丈夫だ。というかお前に言われたくない」

休み時間。草野は前の席の中村に話しかけた。中村と草野が知り合ったのは高校に入ってからだが、やけに馬が合っ
て二年生なった今では親友と呼べる間柄である。

中村は授業中ずっとなにか悩んでいるようで、草野は気になっていた。

「なんかあったの？ 今日ちょっと変だよ」

「うーん……」

中村は視線をあちらこちらと動かしていたが、一つため息をつくと草野のほうを向いた。

「なあ草野」

「なに？」

「一目惚れって本当にあるんだな」

「ひとめぼれ？」

ああ、お米のことか、と草野は思った。

「ひとめぼれがどうかした？」

「いや、その、つまり」

中村は恥ずかしそうに、小さな声でこう言った。

「……俺は、恋の病にかかってしまったのかもしれない」

鯉の病にかかってしまったのかもしれない？

草野は混乱した。どういうことそれ。

「え、よくわかんないんだけど」

「俺にもよくわからん。だけど、今俺に渦巻くこの気持ち、これが恋というものだと思うんだ。なんか、こう、胸が締め付けられるというか」

気持ちが鯉？ 胸が締め付けられる？ それは相当やばい病気じゃないの？ 草野はさらに混乱した。

「びよ、病院に行ったほうがいいんじゃない？」

「恋の病は医者じゃ治せない。面白くもない気取った言葉だと思っていたが、いざ我が身になってみると馬鹿にはできないな」

医者じゃ治せない鯉の病って、呪いってことか！

「ごめん、最初から説明してくれる？ なんかすごい大変なことみたいだから」

「そうだな。じゃあ——」

中村が詳しく話そうとしたそのとき、チャイムが鳴った。

「昼休みに話す」

「わかった」

草野は真剣な顔でうなずいた。これは、思っていたよりまずいことになっているのかもしれない……。

「つまり、朝急いでいたら女の子とぶつかって、その子と目が合ったときにもものすごい衝撃を受けて、それからずっと胸が締め付けられるような感じになっているってこと？」

昼休みに入って、中村から朝の出来事について聞いた草野は話をそうまとめた。

「まあ、そういうことになるかな」

中村は落ち着かない様子だ。いつもご飯はゆっくりと食べているのに、今日は流し込んでいるに近い。

「それでなんで鯉？」

草野にはそこが一番の疑問だった。

「なんで恋って、これは恋じゃないのか？」

「はあ、鯉なのか」

草野はあえて追求しなかった。もしかしたらその女の子のせいで中村はおかしなことになっているのかもしれない。

そしてこれは、あまり他の人に相談するべきではないとも思った。ただでさえ中村は変わり者として見られているのだ。鯉の呪いだなんて話になったら、周りの中村に対する目が冷たいものになってしまう。

友人想いの草野であったが、しかし自分もみんなから変わり者として見られているとは気づいていなかった。

「一体どうしたらいいんだろう……」

中村はさっきからため息ばかりついている。そんな中村を草野は見たことがない。これは本気でどうにかしなくては

。

「そのぶつかった子はうちの学校の制服を着てたんだよね？ よし、会いに行こう！」

草野は力強く言った。もしこれが呪いなら、かけたと思われる人物にどういうことか聞くのが一番早い。

「お前がよくわからない状態になっているのはその子のせいなんでしょ？」

「そ、そうだが、でも……」

モジモジし始める中村に草野は目を覆った。先生にいくら怒られても平気な顔して遅刻してくる図太いお前はどこいった？ 時速百二〇キロの野球ボールが顔面に当たったときも痛い顔なんて見せなかったし、せっかく書いたレポートにお茶をこぼしてダメにしてしまったときも泣き言一つ言わなかったのに。

こんな中村は中村じゃない！ 草野は中村の正面に移動し、立ち上がらせた。

「どうした？」

「中村、歯あ食いしばれ！」

「え？」

バシィ！ という音が教室中に響いた。草野が中村の頬を思いつきり叩いたのだ。

周りがなんだなんだと二人を見る。

「な、なにをする！」

「なにウジウジしてんだよ！ お前らしくないぞ！」

「く、草野……」

殴られたことと、強い口調の草野に中村は驚き、やがてなにかに気づいたかのようにうなずいた。

「そうだな、俺らしくなかったな。……よし、あの子に会ってみよう」

草野はホッと胸をなでおろした。いつもの中村に戻ったようだ。

「じゃあどうする？ 放課後に玄関で張ってみる？」

「いや、まだ時間がある。今から探しに行こう」

「そうこなくちゃ！」

早速二人は教室を出て、目的の女の子を探しに行った。

放課後、中村と草野は玄関にいた。結局昼休みには見つけることができなかったのだ。

「もし部活とかやってたら、長い時間待つことになるね」

「……なあ、会ってどうすればいいんだ？」

中村はまた落ち着かない様子に戻っていた。いつもの状態に戻ったのはほんの短い間だけだったらしい。呪い恐るべし。草野はまた叩こうかな、と思ったがこの調子だとあまり効果は期待できないだろう。それに、会ってどうするかというのは考えるべきだ。

まず、見つけようとしている女の子がどんな人物なのかによる。中村を鯉の病だか呪いだかで腑抜けにってしまった奴だ、慎重にならなくては。

「こういうのはどう？ まずはその子のゲタ箱を見つける。そしたらそこに相手呼び出す手紙入れて、おれたちに有利な場所に誘い出す。そこでガツンとやるわけ」

言ってみたものの、ガツンの部分はノープランな草野だった。

「それはいわゆる恋文というやつか？」

鯉文。また鯉か。中村は鯉にとり憑かれている。もしや女の子は鯉が化けたものではないかと草野は思い始めた。そういえば、ひとめぼれはなにか関係があったのか？ ひとめぼれ。鯉。……おいしそう。

「草野！ いた、あの子だ」

中村が鯉の女の子を見つけたらしい。草野もそちらを見てみると、体格は小柄で髪のはきは肩ぐらい、顔立ちは温和な感じの、なかなか可愛い子だった。少なくとも鯉っぽくはない。

「どどど、どうする？」

「落ち着けよ。なにも思いつかないから、さっきのおれの作戦でいこう。ゲタ箱を確認しないと」

女の子が靴を履き替えるところをこっそり覗き、彼女が玄関から出るのを見送ってゲタ箱を確認しに行く。その間ずっと中村は胸の辺りをおさえていた。

「おいおい大丈夫？」

「ダ、ダメかも知れん」

「しっかりしてよ。えーと、右から三番目、下から二番目だな。おぼえた。よっし、次は手紙を書くんだ」

その言葉に中村が難しい顔になる。

「俺は恋文なんて書いたことがない」

そもそも鯉文ってなに？ ツッコむべきなのか草野は迷った。
「とにかくやってみよう。そうだな、相手を油断させて、うまく懐に飛び込めるような感じで」
「そんな文章を書かなくてはいけないのか。もっと自分の感情とか思っていることを素直に書く物だと思っていたが」
思っていることを素直に書いたらこの場合『お前に出会ったときに受けた衝撃が忘れられない。あれから俺の胸は締め付けられるようで、頭からはお前のことが離れない。一体どうしてくれるんだ』みたいな感じになるのだろうか。
「……素直に書いちゃダメでしょ」
そんな文章では相手が警戒する。
「そうか、まあ、書いてみることにしよう」
その日は家に帰り、中村が相手呼び出す手紙を書いてくることになった。



次の日。
「書いてきたぞ……」
目の下に隈をつくった中村が手紙を取り出した。
「お、見せてくれよ」
「嫌だ。なんかすごい他人には見せられない文章になってしまった気がする」
「いいじゃんか〜」
「それより、昨日書いている途中で気づいたんだが」
「なに？」
「知らないも同然の人に手紙をもらっても困るんじゃないか。悪戯だと思われるかもしれないし、どこかに呼び出しても来てくれるかわからないだろう。いやむしろ来てくれない可能性が高い」
確かにそうだ。全然そんなこと考えてなかった。
「じゃあ直接対決する？」
「対決ってなんだ。戦うわけじゃないだろう」
中村は本当に腑抜けてしまったらしい。相手は自分に呪いをかけた相手だというのに、戦う覚悟もないなんて。もしや、症状が進行しているのか。だとしたら中村には正しい状況分析ができていないのかもしれない。
「まあ対決は置いておくとして、適当にその辺で直接会ったら色々とまずくないか？」
「そうだな、誰が見ているかわからないし、相手に迷惑がかかるかもしれない」
相手のことまで気にするのは中村の優しさなのか、それとも呪いのせいなのか。もし後者ならば中村は洗脳されかかっているということだ。
おのれ鯉め、そこまで中村を支配するとは！
おれの中ではすでに相手の女の子イコール鯉になっていた。
「やっぱダメもとでも手紙出してみたほうがいいね。人気がない時間を指定してさ。場所は学校の裏の、ほら、変などこあったじゃん。ガラクタが置いてあるところ。あそこがいいと思う。そういうのもう書いた？」
「いやこれから書き足す。えーと確かあまり使わない物置の横だな。それで伝わるだろうか」
「差出人はどうするの？ 名前書いたってわからないでしょ」
「昨日の朝ぶつかった男、と書いておいた」
ホントのこと書いちゃうのかよ。
「うーん、ま、いっか」
あんまり考えてもしょうがない。別にこれを必ず成功させなくてもいいのだ。
そんなこんなで手紙が完成し、昼休みにゲタ箱へ入れに行った。
「ほ、本当に大丈夫だろうか、こんな手紙で」
また呪いが発動した。
「そんなに不安ならおれに一回見してよ」
「それは嫌だ」

「じゃあもうやるしかないでしょ」

中村はうなずき、ゲタ箱にゆっくり丁寧に手紙を入れた。

その後の中村は落ち着きのなさが最高潮だった。もう見ていられない。早く決着をつけなくては。

いよいよ運命の放課後。指定したのは、帰宅部は大方帰っているが部活はまだやっているという、半端といえば半端な時間だ。

おれたちは約束の場所をこっそり覗ける位置に隠れていた。中村は深呼吸を何度もしている。

「お、マジで来ると思わなかったなあ」

女の子が辺りを見回しながらやって来た。

もしかしたら相手も中村に用があるのかもしれない。なんの目的もなく呪いをかけたわけではないのだろう。

「とりあえず後ろから近づいて動きを封じるか」

「お前はなにを言ってるんだ？」

「え？ じゃあどうするの？」

「どうするのって、ここまできたら俺も腹を決めるしかないだろう」

どうやら中村は堂々と正面から行くつもりようだ。中村らしいといえば中村らしい。

「ふー、……行ってくる」

大きく息を吐き出し、中村が動き出す。おれもその後に続こうとした。

「なんでついてくるんだ？」

「一人で行くつもりかよ？」

「当たり前だろ。男が付き添ってもらうなんて恥ずかしいこと出来るか」

もし相手が鯉の化け物だったら簡単になんとかできるとは思えない。だが中村の覚悟を無駄にはしたくない。

「わかった。やばくなったら助けに入る」

「そんなことをしなくてもいい。これは俺の問題だ。お前には助けられたが、最後くらいは俺が自分でなんとかしなくちゃいけない」

おお！ それでこそ中村だ。自力で呪いを打ち破ったのか！

「そこまで言うなら。……幸運を祈る」

「ありがとう」

中村は微笑み、毅然と歩き出した。その背中が、まさに戦士だ。

「あの」

中村が鯉女に話しかけた。

「すみません、こんなところに呼び出してしまって」

鯉女がなにかそれに答えるようなことを言ったが、声が小さくて聞こえなかった。

「手紙に書いていることで伝わったと思うのですが、改めて言わせてください」

中村が息を吸い込む。

「初めて目が合った時から好きです！ 付き合ってください！」

えええっ！ どうした中村！ 鯉の呪いは解けてなかったのか？ まさかこんなことを言い出すとは！

中村の言葉に鯉女は、さきほどよりは大きな声で、

「実は、私も」

ん？ んんん？

「目が合った瞬間からあなたのことが」

いやいやいや。

「……好きです」

意味がわからないんですけど。

中村が驚いた顔をしたが、おれの脳は驚愕を通り越して思考停止した。

「あのとき、自分に何が起きたかわからなくて。その、つい逃げてしまったんです。ごめんなさい」

中村が彼女の言葉に首を振った。

「いいえ、俺も自分がどうしてしまったのかわからなくなっていたんです。お互い様ですよ」

そして二人ははにかんだように笑った。そこでようやくおれの脳が動き出す。

「ちょ、ちょっと待って！」

隠れていた場所から出て、二人のところへ行く。

「草野、ありがとう。お前のおかげだ」

「あの、この人は？」

「ああ、俺の友達で——」

中村が鯉女におれを紹介しようとしている。そんな場合じゃないはずなのに。一体どういうことなのか、誰か教えて。

「鯉は？ 呪いは？ なんでこうなってるの？」

「なにを言ってるんだ」

「その女の子は鯉が化けてるんじゃないの？ それでそいつに呪いをかけられてお前はなんかフニャけちまったんじゃない」

「おかしなことを言うなよ。呪いってなんのことだ」

鯉女はおびえた様子で中村の後ろに隠れた。

「さては、中村にさらに強力な呪いをかけたな？ おい、中村を元に戻せ！」

中村が戸惑いの表情を浮かべる。

「いい加減にしろよ草野。お前変だぞ」

変なのはお前なんだ中村！

「目を覚ましてくれ中村！ 今こいつに呪いを解かせてやる！」

おれは鯉女に掴みかかろうとする。

「ええい、お前が目を覚ませ！」

鯉女に触れる前に、中村の右ストレートがおれの左頬に直撃した。

えー、なんで殴られるの？

仰向けに吹っ飛ばすように倒れる。その間の時間がやたら長く感じた。

ああ、空が赤い。赤い空を見ると、最近父さんに質問したことを思い出す。

なんで空って青かったり赤かったりするの？

もうガキじゃないんだからそのくらい自分で考えろ。

そりゃないよ父さん。知らないなら知らないと言ってよ。

うるせえ。いいから勉強しろ。

回想シーン終了。でこぼこした地面の感触が体に伝わってきた。

「痛いよう」

「正気に戻ったか？」

草野が手を差し伸べてきた。

おれは元から正気だって。……正気だったよね？

「よくわかんなくなってきた」

「お前、なんか勘違いしてたんじゃないか？」

「そうなのかな」

「まあ、落ち着いてくれたのならもういい。俺は彼女ともう少し話していくから、先に帰ってていいぞ」

中村は鯉女のほうを向いて言った。彼女はポカンとしてこちらを見ていたが、中村と視線が合うと顔を赤らめた。うーん、鯉じゃなかったのか？

「えー、態度冷たくない？」

「変なことを言った罰だ」

「はあ、じゃあ帰ることにするよ」

なにが勘違いだったんだろうと思いつつ、おれは家への道をトボトボ歩き始めた。やっぱり鯉というのがなにか

間違ってたのかなあ。

家に帰ると、居間に米袋が四つほど置いてあった。ひとめぼれ、と書いてある。こんなに買い込む必要あるのか？

「お帰り。ああ、それ知り合いにもらったんだ」

珍しくおれより先に帰っていたらしい父さんが説明してくれた。

そうだ、父さんに聞いてみよう。

「父さん、鯉って、なに？」

「はあ？ 魚だろ」

「だよね」

おれはなにを勘違いしていたんだろうと、再び悩み始めた。